



Relive Journal



りらいぶ”ジャーナル No.43

2022年 陽春号 (4月20日発行)

<“りらいぶ”憲章>

- 組織、肩書き、経歴にとらわれない自由な生き方
- 知識、経験、技術を生かして社会に貢献する生き方
- 初心に帰って新しい自分を発見する生き方

私たちNPO法人リタイアメント情報センターはこのような生き方を“りらいぶ”と呼び、その生き方をサポートします

<目次>

1. 出雲路旅日記 (会員 鈴木 信之)
2. 七つの大罪 (会員 ヤスコ Wild (杉山 泰子))
3. 8月は暑いです (会員 鳥居 雄司)
4. バリ島 チャンディダサの日々 ① ブグブグ村の成人式 (黒部 正也)
5. バリ島 チャンディダサの日々 ② オランダ人の絶贊 (黒部 正也)
6. コロナ禍でも私のライフワーク…なのかな? (会員 鈴木 信之)
7. 北米行きの契機 (会員 赤神 潔)
8. 事務局からお知らせ — 小冊子謹呈の連絡



1. 出雲路旅日記

会員 鈴木 信之

東京都のコロナ蔓延防止条例が終了した翌日、私と家内は出雲に向けて旅立ちました。コロナ期間中も一昨年10月には鬼怒川・日光へ、昨年6月には福岡へ、それぞれ2泊3日の旅行をしましたが、やはり旅行は良いもので、年に2回くらいは行きたいものです。特に最近はコロナ禍で、海外、とりわけ縁のあるハワイ島に行けなくなっているので、余計旅への想いがつのります。

さて今回の旅には、大きく三つの目的がありました。一つ目は私たち夫婦は神前結婚式でしたが、その本家本元である「**出雲大社**」に初めて参詣すること。二つ目は20年前に私が出張で見て心から感動した「**宍道湖の夕暮れ**」をもう一度見たい、家内にも見せたいということ。そして三つ目はテレビ、雑誌などでたまに目に見る有名な「**足立美術館**」に是非行ってみたいということでした。

2022年3月22日(火) 薄曇り

東京の天候はこの日やたら寒かったらしく、夜、テレビのニュースで見ると雪まで降ったようです。私たちは羽田空港10時5分発の出雲行き日本航空機で無事に出発。JALマイレージをわずかですが利用した旅行です。フライト時間は1時間25分。ほとんど雲の中の飛行だったので、やや揺れがきつかったけれど、何とか無事に着陸体制、初めて降りる空港は日本海に突き出していることを知りました。到着したのはその名もなんと「**出雲縁結び空港**」。私たちの年齢ではやや照れ臭かったです。天候は薄曇り、出発した時の東京より寒くありません。



出雲縁結び空港

空港到着後は連絡バスに乗って約45分、出雲大社前まで直行しました。着いたら12時半頃、まずは荷物をコインロッカーに預け、参詣前に腹ごしらえ、とばかりに門前にいくつもある出雲蕎麦の店に飛び込みました。注文したのは、有名だという「三色割子蕎麦」。この地域、もとは信州の殿様が配置換えの折、蕎麦職人も信州から連れてきた、ということらしく、確かに歯ごたえのある蕎麦で、腹持ちも良さそう。でも信州蕎麦よりは、やや上品な味。結構気に入って二日目の昼も、最終日の出雲空港での食事も、出雲蕎麦にした次第です。

さて、いよいよ**出雲大社の参詣**です。広くて長い参道をゆっくり歩いていくと、心なしか空気も清らかで、肺の中まで洗われる想い。三連休明けやコロナのためか、参詣客もまばらで落ち着く雰囲気です。参道の脇には広場がつながり、そのあちこちにウサギの彫刻、やっぱり出雲らしい。

ようやく拝殿到着。テレビなどでは何度も見ていましたが、しめ縄の太さ、雄大さには圧倒されました。参拝方法は通常と異なり、ここは二礼四拍手一礼とか。作法にのっとり。お賽銭も納めました。拝殿の周りをぐるりと回ると、ご本殿近くの金社という古い建築の縁の下に砂を入れた箱があります。見ているとビニール袋を持った人が、その箱に砂を納めています。どうやら近くの稻佐の浜から採ってきた砂をここに収めるものらしいのです。



神社の境内の隣に大きな結婚式場があります。さすが神前結婚式の本家本元です。この神楽殿に渡してあるしめ縄はとにかく巨大でした。太さも長さも、拝殿のしめ縄の倍くらいあるのではないか、と思われました。更に、相撲の開祖、野見宿禰を祀った小さな社殿と相撲の土俵があります。



出雲大社神前にて

1時間半ほどで参拝も済み、時間も早かったので思い切って、**稻佐の浜**まで足を延ばすことになりました。片道20分程ということでしたが、途中で歌舞伎の開祖と言われる「**出雲阿国の墓**」に立ち寄ることにして、少し大回りをしました。墓は静謐な場所にあり、430年ほど前に歌舞伎踊りを始めた女性を偲ばせます。私たち家族にも縁のあるお墓に思えました。

稻佐の浜も圧巻でした。浜の真ん中に大きな岩が鎮座し上の方には小さな社があるようです。雲間から覗く陽光は、午後のこの時間逆光で、岩の周りを眩しいほどに神々しく彩っています。空はあくまでも広く、海は日本海の深い蒼さをたたえ、浜の砂は本当に柔らかくふかふかで、これを古の人は兎の毛皮のようを感じたのかもしれませんと思わされました。

古代の人々は、天から降りた神々が、波に乗って海を渡り、この浜に立った、と真剣に信じたでしょうし、現代に生きる私たちも神々と日本人の起源はここにあり、と思わされました。



出雲稻佐の浜にて

出雲大社前に戻った私たちは、この地の名物、紅白の餅の入った**出雲ぜんざい**をいただき、バスでJR出雲駅前に戻りました。一日目の宿は駅前のビジネスホテルを予約し、夕食は近くの居酒屋に繰り出しました。刺身、若干季節外れの松葉ガニ、何よりもメインは焼き魚の**どぐろ**。身が脂もあってほっこりと優しい感じ。日本海の幸を堪能して眠りにつきました。

2022年3月23日(水) 曇り一時雨

JR出雲駅前からバスで約20分、一畠電車の始発駅、出雲大社前駅に到着します。ところが松江しんじ湖温泉方面に向かう電車は待ち時間が1時間以上。仕方ないので駅付近や駅構内をブラブラしていたら面白いものを発見しました。この一畠電車は中井貴一主演の映画

「**RAILWAYS 49歳で電車の運転士になった男の物語**」のモデルになった鉄道で、撮影時にはこの鉄道の初期の車両が使用され、その車両そのものが内部見学可の状態で展示されていました。





なかなか旅情あふれるローカル鉄道で、途中一回の乗り換えを含めて45分程度で終点の松江しんじ湖温泉駅到着。この日宿泊する旅館に電話すると、すぐに駅まで荷物を取りに来てくれたので、私たちはようやく手ぶらで松江市内見学に出発です。

市内見学は、ぐるっと松江レイクラインバスの一日券を購入して乗車。これがまたかわいいバスです。運転手さんはおそらく半数以上が女性のようでした。まずは松江と言えば**松江城**。私も初めて見学しました。外観は勇壮、壮大な立派な城でした。中に入ると5層の天守最上階まで、木製の急な階段を上ります。途中で諦めようか、と思うほど息が切れましたが、最上階の天守閣からの眺めは素晴らしいものでした。昔の武士は着物に袴でこの階段を駆け上がったり駆け下りたりしたのでしょうか？残念ながら曇天でスッキリとは見えませんが、遠くに中国地方最大の冠雪している**大山**まで見渡せます。このお城は有数の名城と聞いていましたが、その通りだと実感しました。



松江城



松江城
天守閣から
大山を臨む

松江城から降りて、今度は温かい出雲蕎麦を堪能した後、**松江堀川巡り観光船**に乗って、松江城の周りのお濠を一回り。途中に架かる橋のうち4か所では橋桁までの高さが低く、ここをくぐるときは当然船の屋根が下がる作りになっており、併せて乗客の私たちも体を折り、首をくねなければなりません。これがまた楽しい経験です。

下船後、船頭さんに勧められた**松江歴史館**に行き、喫茶きはるで現代の名工の手による和菓子**ねりきり**をいただきました。家内は抹茶セットで、私は珈琲セットで、通常和菓子一つのところ、更に一つずつ追加して、たっぷり楽しみました。至福の休憩時間でした。



松江堀川
巡り観光船



松江名物和菓子

歴史館を出ると、小雨が降ってきたので傘をさして、武家屋敷の立ち並んでいたという**塩見縛手**を散歩しました。途中、**武家屋敷**に立ち寄ったり、**小泉八雲旧居**を覗いたりしました。

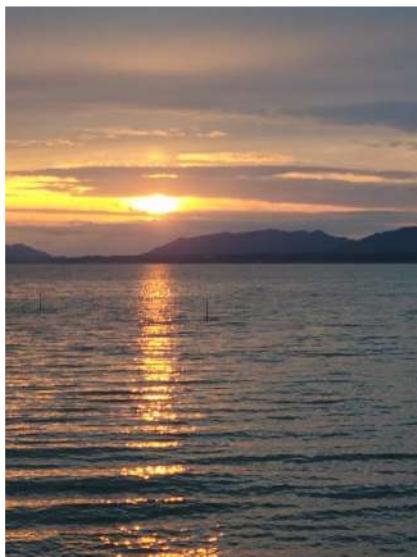
一旦、松江しんじ湖温泉の旅館「なにわ一水」にチェックインし、一休みした後、いよいよ私がこの旅で一番のハイライトと楽しみにしていた**宍道湖遊覧船白鳥号**での、**宍道湖サンセツト見学**です。



しかし小雨は上がったものの相変わらずの曇天。気分的にかなり落ち込み、おまけに乗船場で待っていても他の乗客と思われる人が一向に現れません。今日は本当に運航するのか?と疑問を抱いた頃、遠くの駐車場のある乗船場方向から遊覧船がやってきて、夕方 18 時丁度に乗船したところ、私たちだけの貸し切り状態。運転士とスタッフと私たちの 4 名だけで出発です。乗船料だけでは申し訳ない気持ちでいると、なんと西の出雲大社方向の空が赤く染まり始めたではありませんか。

奇蹟とはこういうことをいうのか。私が 20 年前の 6 月に出張の夕刻乗ったときは、梅雨時ではありましたか晴れでいて、サンセットとともに空が鮮やかなまでのパープルに染まり、そこへ白鷺が一羽、天に向かって飛んでいく光景を見て、涙が出るほど感動したものです。

その光景の再来を願ったのですが、今回は茜色の空でした。それでも一時は夕日から光の道が一条天に向かって立ち上り、湖面は夕日から我々の遊覧船に向かって、広く大きな光の道が描かれている、これはまた新たな感動そのものでした。こうした光景を見て、古の人々が出雲大社のあたりを聖地とあがめたであろうことは、容易に想像できました。



宍道湖夕景

約 50 分間の乗船で下船する頃には、夜の帷がすっかり降っていました、旅館に戻り、のど

ぐろの煮つけ、出雲牛のしゃぶしゃぶなど豪華な山陰料理をおなか一杯いただき、きれいで軟らかいしんじ湖温泉の湯につかって、この夜はぐっすりと眠りました。

2022 年 3 月 24 日 (木) 晴れ

楽しかった出雲路の旅も今日が最終日。帰りの飛行機は 19 時 5 分発だったので、まだ目いっぱい楽しめると思ったのですが、当初予定していた牡丹で有名な由志園は、牡丹の季節ではないということもあり、憧れの足立美術館見学一本に絞り、ゆっくり見学するつもりでした。由志園も回るときはタクシー利用かな、と考えていたのですが、タクシーチャーターは料金が高いし、時間もたっぷりあるんだから、JR で松江から最寄りのどうようすくいで有名な安来駅まで向かい、ここからシャトルバスで美術館へ行こうと思いました。

ところがこれが大変。JR 山陰本線は遅れるは、そのおかげでシャトルバスには乗り遅れるはで、結局美術館に到着したのは正午過ぎになってしまいました。



足立美術館正面

美術館に足を踏み入れて驚きました。その庭園の美しさ・壮大さは筆舌に尽くしがたいものがあります。この庭園の番組が 4K・8K テレビの良きコンテンツとして時々登場しますが、画面で見る印象をはるかに上回る衝撃です。日本式庭園の極致であり、それに西洋式庭園の深い奥行きを加え、一幅の動く絵画の印象です。



庭の正面両サイドに流れ落ちる滝が、この庭園の生命力を表現しているように感じました。世界観、という言葉にふさわしい庭園と言えましょう。



足立美術館 庭園全景

感動したのは、「ここに座って両側を見てください」と書いてある席に座った時です。右も左も窓になっていますが、外の様子がまるで絵のように見えます。窓の桟が額のようになっているから動く風景画です。少し移動すると奥に掛け軸のように見えるところもあります。なんという工夫された見せ方でしょう。まるでディズニーランドのアトラクションのような、エンターテイメントも用意されています。



足立美術館 自然の掛け軸

この美術館のもう一つの見物は、**横山大観**はじめとする日本が誇る、日本画の大家たちの

巨大な作品が数多く展示されていることです。その中には昔教科書などで見た作品も数多くあります。横山大観、上村松園、伊東深水、川端龍子、……、錚々たる巨匠たちの大作に圧倒されます。

新館には現代日本画家の大作も多数展示され、こちらでは新鮮な芸術の息吹を、深々と感じました。この美術館はすごい！ すごすぎる！ 2,300円の入場料は決して高くない、と感じました。よくこれだけのものを作つて、現代にも未来にも遺してくれている、とつくづく感服しました。

残念ながら絵画のコーナーはいずれも撮影禁止でした。

帰り道は、来た時の反対で、シャトルバス→JRと乗り継いで、松江駅まで戻りました。駅構内のショッピングプラザでお土産の買い出し。蜆、あごの野焼き、因幡の白うさぎ、どじょう掬い饅頭等々。中でも今朝、しんじ湖温泉の旅館からJR松江駅まで最後に乗ったぐるっと松江レイクラインバスの女性運転手さんが、一度降りた後再会した時にくれたお菓子、桂月堂の「かこい梅」。地元の方が、なんのご縁もないのにくださったということは、きっととてもなく旨いに違いない、とこれまた買い込みました。帰宅して食したところ、これがなんと予想に違わず激旨！ いわば甘く煮た梅大福のようなお菓子だが、これは絶品。こちら方面にお出かけの方のお土産に、是非お勧めです。そしてもちろん地酒の日本酒。720mlを二種二本買い込み、機上の人となりました。

そうそう、最後の最後に大ドジ。出雲縁結び空港までの高速バスの車中にどうやらスマホを置き忘れたらしい。最後に日本酒を一本購入した時、電子マネーで払おうとしてスマホがないことに気付き、慌ててまだ高速バスが移動していないことを祈りながらバス停までヨタヨタと走り、うつらうつら居眠り中の運転手さんに聞いたたら、空港の中央案内所に届けて何度も放送で呼び出したんだけど気が付かなかった？と叱られる。いやあ、あった、あった、と胸をなでおろし、ホッと一息ついて、レストランでグラスピールと最後の出雲ぜんざい、出雲割子蕎麦を堪能しました。あんなものを忘れるなんて、



そして呼び出しが聞こえないなんて、と年を取った自戒と反省で、ビールの味はやや苦めでした。皆さんもくれぐれもご注意を。

いろいろありましたが、とにかく最高の旅でした。出雲路は徹底して「和の旅」、私たちのルーツを想い、日本の文化や伝統のすばらしさに心から感動する旅でした。今度は伊勢神宮に参詣しなければならない、宇治の平等院も見てみたい、足を延ばして評判の八重山列島も行かずには死ねない、ハワイ島にはあと二回は行かないと投資の元も取れないなどと、私たちの残り時間が少ない中でいろいろ工夫しなければと、思いを巡らしながらの帰路でした。

以上

2. 七つの大罪

ヤスコ Wild
NPO 法人関西シャンソン協会理事長
会員 杉山 泰子

私たちが犯す罪は七つどころではない。数え上げれば切りがないが、今回のところとりあえず七つの罪で話をまとめてみよう。

- 1) **暴食**: 年を重ねると、胃の消化能力が弱ってくるし、歯や歯茎の具合も安定しないので食べたくてもそんなに食べることができなくなる。
- 2) **色欲**: 年を重ねると伴侶を先に亡くした人が増えてくる。やもめになった人が若い女の尻を追いかけても、たいていの場合世の中の人は笑って済ませてくれる。けれど世の中から裁かれることがなくなった時は浮気心も萎えている。
- 3) **強欲**: 年を重ねると金銭欲より健康の方が大事になる。お金はあの世には持つていけないことを悟る。
- 4) **憤怒**: 年を重ねると自分のことで精いっぱいで、人が何をしようか関心を持たなくなる。従って他人に腹も立てなくなる。

5) **怠惰**: 歳を重ねると、別に急げようと思っていわけではないが、動作が緩慢になり何をしても急げているようにしか見えない。

6) **嫉妬**: 年を重ねると、あなたの奥さんがテレビのイケメンにうつつを抜かしても、やきもちを焼く気もしない。

7) **傲慢**: 年を重ねると、た「おれは昔偉かったんだぞ」と叫んでも、誰も相手にしてくれない。というわけで、私たちは罪を犯さなくなっている。

日々の暮らしは年金生活で節制しておとなしく過ごしている。

相手が見つからないので伴侶との純潔を守り、欲張ったところでどこからか転がり込んでくる大金は望むべくもなく、怒ってみたところで今さら環境が変わるわけでもないので腹も立たず、急げていたって周りの人は大目に見てくれるし、にこにこ笑ってさえすればあのはいい人だといってもらえるし、昔のことを自慢しようにもたいした手柄もない。

罪を犯さなくなった私たち、ちょっと心さみしいね！



『七つの大罪と四終』
(ヒエロニムス・ボス画、1485年頃)

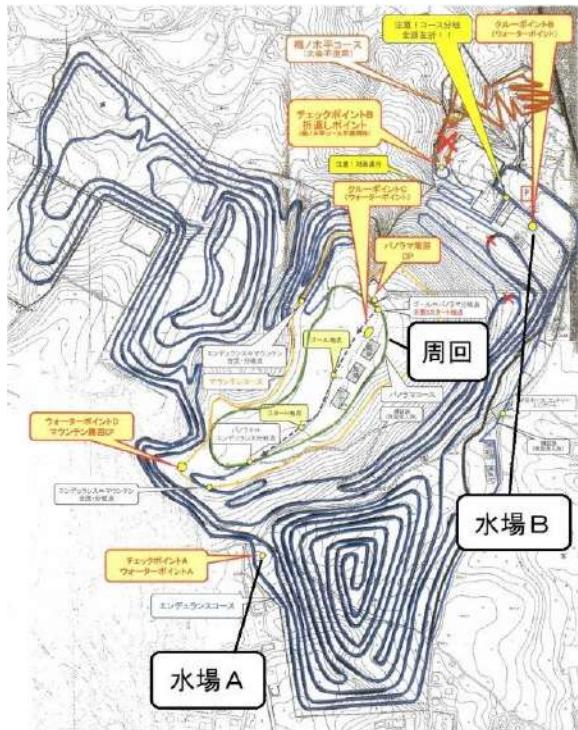


3. 8月は暑いです

会員 鳥居 雄司

今回の会場は

8月も北海道の大会を考えていましたが、9月の大会に向けて馬の疲労回復で8月はお休みです。それで伊豆の大会に出ることにしました。大会は、伊豆急行「富戸」駅に近い高室山をまるごと使ってコースを設定しています。このコースはすべて私有地内です。



エンデュランス大会は長い距離のコースで行われ、北海道の場合は道の駅に周回コースと調教、出発前の集合、すべての競技馬を一時保管する臨時の厩を設ける場所、大会の開会、閉会の会場、臨時の馬場、多くの馬運車、参加者の駐車場など広い用地が常に準備されています。本州では広い場所がとれる公営グランドなどを会場にあてて行われます。それに対して伊豆のこの会場はすべて私有地内に常時準備されています。さらにエンデュランス大会に出場できるように訓練されている馬を50頭ほど（もっと多いかも？）所有し、

馬が草を食べたり、走り回ったりできる放牧地を山の頂上付近に設けています。これは馬の健康に良い影響を与えています。馬房も広く清掃が行き届いていて、大切に飼育されています。また、馬術競技や練習に使われる馬場は屋根があり、天候に関係なく乗馬を楽しめるようになっています。さらに遠隔地から大会に参加する選手や役員用にホテルを持ち、私もこのホテルに泊まります。最近のエンデュランス大会は走行距離が120kmの長さでも出発から到着まで1日に収める日程なので夜明け前に出発して最終到着は日没後になります。会場内のホテルはとてもありがたい存在です。この会場の持ち主はエンデュランスに惚れ込んでアメリカのテビスカップ(180km)で完走した方です。馬にとって良い環境になるように工夫された施設です。

出発すると

今回はこちらの会場から道産子の牝馬ヒカリに乗せていただきました。馬齢11歳でエンデュランスの活躍を期待できる年頃です。天気は晴れ、気温32度の微風でした。山の上で蒸し暑さを感じません。出場する60kmの第1区間30kmを5時に出発しました。走行予定時間を2時間30分(10kmを50分で走破)と計画しました。ここは林間のつづれおりに沿ってクネクネ走るところが多く、広い平原で直射日光を浴び続ける場所は出発、到着地を除いてありません。下りの急な砂利道では馬が足を滑らすことが多く、常歩です。

今回は3頭まとめて走行していましたが、1頭が放馬(馬が手綱を振り放して逃げる)したので他の1頭が馬を追いかけ、私は1頭で水場Aに着きました。ここで水を飲むと良いのですが、全く興味をもたず、水場Aを離れました。その後、2頭は私に追いつき、7時59分に1区間を終えました。予定より30分程多くかかったのは放馬とヒカリの前進気勢(走行しようという馬の状態)の乏しさでしょう。

さらに動きは悪く

1区間走行後の獣医検査で腸音、歩様、前進気勢、態度、全体観察の項目で1段階評価が落ちました。2区間の出発は8時58分を示され、動き出したものの反応が悪く、常歩が多く



なりました。水場Aでは、飲むことなくわずかな草を食べました。直射日光が少ないと今は30度を越える気温で運動途中に水を飲まないのは不安です。さらに鼻息が大きく聞こえるのにあわせて馬体の震えを感じるようになりました。3頭一緒にでかろうじて運動しているような状態が続き、水場Bでは水も草も口に入れず鼻息はさらに大きな音になり、馬体を震わせます。最後に景色の良い頂上の周回コースを2周すると終了です。

1周目は速歩の継続ができないので常歩で移動しますが何とも心もとなくいつ止まっても不思議でない状態になりました。そこで最後の1周は走行制限時間を越えないように馬を降りて私が引いて動かしました。

エンデュランス競技の規則で、最終到着は騎乗の義務があります。そこで到着目前で騎乗して何とか2区間を走り終えました。到着時間が13時28分だったので4時間30分かかりました。残るのは獣医検査です。まず心拍数を1分間64拍未満にするために馬体に水をかけて体温を下げて心拍数を減らすことに集中しました。

心拍数が下がったところで獣医検査を受けると筋肉の検査項目で評価が大きく下がった以外は評価の目立つ低下はなく無事に完走できました。

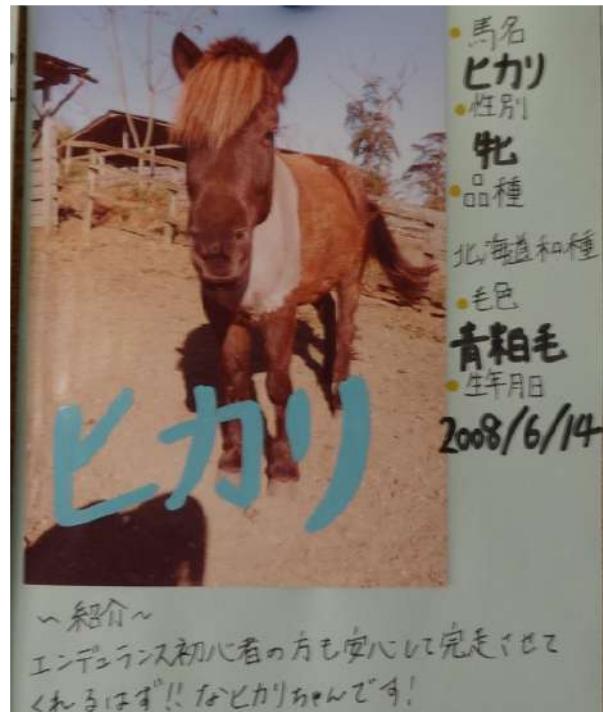
ヒカリの様子が

獣医検査を終えて馬房にもどると、ほっとしたのか目の焦点が定まらない感じがあり、更衣室で10分間横になって休みました。馬房に戻るとヒカリの姿がなく、馬場で獣医の手当てを受けていました。事情を尋ねるとヒカリの様子がおかしいという話があり、手当てをしているそうで、疝痛になっていたかもしれないとのことでした。

疝痛の兆候は元気がない、食欲がない、排便がみられない、普段と違う発汗がある、前肢で地面をかく行動がある、頻繁に腹部を見るなどがあります。いずれも日頃の様子と比べるので普段から世話をしていると見つけやすい症状です。疝痛は消化器系の痛みですが、手当てが遅れると命を失います。今回は、私が馬房を離れていた時にヒカリを良く知る職員が異変を気づいて良かったと思います。

道産子は

道産子はDNAの比較から、モンゴル在来馬の祖先が対馬経由で輸入されて全国に広がった馬だそうです。小型の馬ですが、厳しい自然に適応しているせいか力が強く丈夫です。



体重は350~400kg(競馬のサラブレッドは500kg前後)ですが200kg近くの荷物を乗せて運べるそうです。ただ、速く走ることは得意ではなく、走ったあとの心拍数はなかなか下がらません。到着から獣医検査を受けるまでの時間制限20分以内で、心拍数を64拍/分未満に下げるのが大変です。それでゴールに近づくと心拍数対応で鎮静化をはかるために軽い速歩や常歩で検査の受診準備を意識します。道産子の性格はまじめで我慢強い印象があり、騎乗していて愛着を感じます。

8月32度は暑かった

極寒の北海道で野外の放牧でも冬を越せるほど寒さに強い馬種ですが、さすがに伊豆の8月32度は暑かったと思います。水場で水を飲むことなく草でしのぐには厳しい天候だったでしょう。頂上の周回コース2周を常歩で回ったことは完走に多少貢献したかと考えています。



4. 「バリ島 チャンディダサの日々 ①」 ブグブグ村の成人式

黒部 正也

チャンディダサはバリ島東北部の浜辺に面した鄙びたリゾート地である。このリゾートの野趣あふれる宿に定年前に三度泊まったことがある。

二〇〇〇年六月、会社定年を機に始めたバリ島民宿暮らしのメインは、芸術村ウブドの民宿を予定していた。ウブドはバリ絵画や舞踊の言わばメッカであり、私の憧れの村だった。チャンディダサの民宿は、その足慣らし程度に考えていた。ところが、場所も宿も予想外の居心地の良さから、外すことが出来なくなってしまった。

二〇〇二年三月の三度目の民宿暮らしもチャンディダサから始まった。チャンディダサでは枕元に時計を置かないことが多い。窓から朝日が射し込んできたのを見計らって起床する。時刻は七時だ。

朝食の前に民宿のオーナー夫人に会った。台所で朝食の準備をしていた夫人に日本から持参した手土産を手渡した。オーナーのシナードさんは、上半身裸で、民宿の塀造りの陣頭指揮をとっていた。修理ですか、と私は訊ねた。

「いいえ、私のデザインで新しい塀を作っています！」
と、うす高く積まれた大きな石ころを誇らしげに指さした。直径十五センチ位の丸い石は朝日を受けて真っ白に輝いた。

オーナーはドイツ人で、夫人のアユさんとバリ島で出会った。結婚して一年の半分はアメリカで暮らしている。留守の間は、運営を運転手のナドウ夫妻に任せている。オーナー夫妻に出会うのは珍しい。

朝食を終えた頃、アユ夫人が私の部屋のテラスに現れた。手には土産に渡した羊羹があった。夫人はテラスの大きなテーブルへ紅茶を運ばせ、私に薦めた。紅茶を手にしながら雑談には入った。私は夫人に名前を訊ねた。

「イダ、アユ、サリです」

「上位カーストのお名前ですね」

夫人は頷きながら、バリ島の古い町、クルンクンの上位カースト出身であると説明した。機会があれば、実家のゲリヤ（お屋敷）へ案内したいと微笑んだ。“イダ”は上位カーストが使用する苗字である。

夫人はドイツ、シュツットガルトで学び、バリ島へ戻った。ウブドで働き夫と出会ったという。朝の楽しい歓談は小一時間続いた。

テラスで寛いでいると、サブウくんが現われた。彼は隣のホテルの運転手で、二十八歳、日本語が堪能である。人柄がよく、私は彼を信用している。

「ブグブグ村のお祭りを見に行きませんか？」

と、誘われた。それならば、とその日予定していたニョマンとイブ・カトゥンの二人のモデルのクロッキーを一時間繰り上げた。午後三時に終えると、サブウの車で、ブグブグ村へ向かった。

鄙びたリゾート、チャンディダサで働く人々は、小さな峠を一つ越えたブグブグ村の人々が多い。彼の家は村の中央にあった。車を広場の道路わきに停めると、狭い路地を歩いた。背丈よりも高いコンクリートの塀と塀の間は、一メートル半位で閉塞感がある。曲がりくねった路地の奥に彼の家があった。

サブウくんのお母さんは、私にもお祭り衣装を用意してくれていた。サブウンくんと私は、早速お祭り衣装に着替えた。腰にジャワ更紗のサロンを巻き、頭上に真っ白いウドゥンと呼ぶ布帽子を被った。

村の中央には大きな広場があった。すでにお祭り衣装で着飾った村人が大勢集まっている。

「間もなく、成人式が始まります」

と、サブウくんは広場の一角を指さした。ガムラン音楽の金属音が高まり、最高潮になったと思ったとき、彼が指さした方向から着飾った二十歳前後の女性の行列が神妙な顔つきで音楽に合わせて境内へ裸足で入って来た。その数七十名あまり。続いて同じ年齢の青年百三十人位が行列を組んで真面目な顔つきで入って来た。



女性は美しい彩の衣装で着飾っている。髪には赤やピンクの花飾りを挿して手にはそれぞれお供えを持っている。良く見ると、頭上の髪飾りが特別に大きく豪華な女性が数人いた。

「あれは、カーストが上位の女性です！」
と、サブウくんが耳元で囁いた。

若い男性は全員胸元まである金色の長い衣装、サブッを身に着け、胸元から上は裸である。背中には剣を挿して、頭上に白いウドゥンを被っている。右手に棕櫚の長い葉を持っていた。最初は女性のドレスの様で私は違和感を持ったが、慣れてくると、りりしい若者の装束に見えてきた。

「私も若い頃この成人式の行列に加わりました」と、サブウくんは感慨深そうに言った。

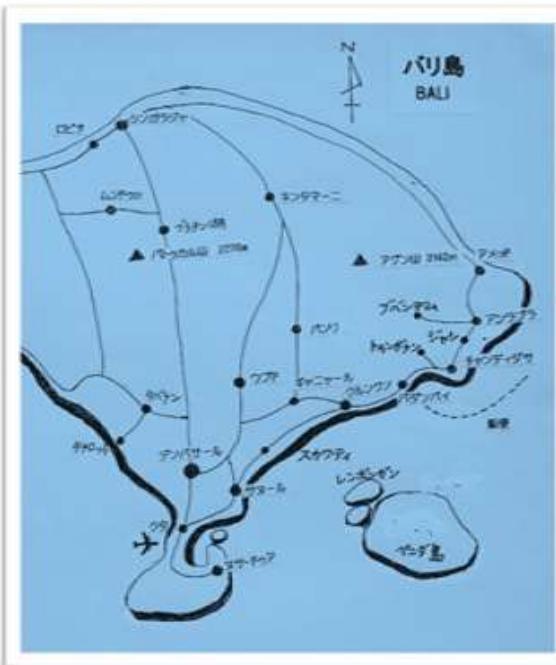
こんなに人々が住んでいたのか、と思うくらい大勢の村人が行列を囲んだ。その数ざっと千人位。黒い衣装を着た整理係が行列の進路を確保するために、群がる観衆を懸命にかき分けた。成人の行列は、ガムラン音楽の高鳴りに合わせて次第に足早になった。最後は小走りになり境内を三周した。

突然、境内のあちらこちらで、村人の歓声が響き渡った。青年たちが一斉に夕空に向かって棕櫚の葉を放り投げた。落ちてくる葉を村人が奪いあった。

「御利益が授かります」

村人は奪い取った棕櫚の葉を、大切に持ち帰り、家の社に供えるという。

お祭りの最高潮の境内のはるか向こうに、日本の富士山に似たバリ島の靈峰、アグン山が夕日に照らされピンク色に輝いた。境内の赤や白の幟が一斉に風に靡き、ブグブグ村の成人式を祝福していた。



筆者プロフィール

黒部正也（くろべまさや）

1935年三重県紀伊長島町に生まれる。

2000年64歳で定年退職を機に、バリ島芸術村ウブドにて絵画技法を学びながら民宿暮らし年1ヶ月を始める。

2014年まで毎年、15年間通う。
ウブドで個展2回、兵庫県川西市ギャラリーで個展4回開催。

エッセイは柏木智光先生に師事、ふづきの会会員。

著書「グデくんの青春、バリ島青年との旅」
文芸社



5. 「バリ島 チャンディダサの日々 ②」 オランダ人の絶賛

“Prisoner of the charm of Bali”

黒部 正也

チャンディダサの海辺で散歩中の旅行者に出会った。オランダからの長期滞在者で年齢は七十二歳で独身と言う。ラグーンのすぐ脇にあるロスメンに住んでいる。私は会社を六十五歳で定年退職してバリ島の民宿暮らしを始めたばかりで、彼の住まいに興味があった。バリ島は世界的に有名なリゾートなので、長期滞在者向けのロスメンと呼ぶ小さな個人経営のホテルが数多くある。日本流に言えば、民宿である。

彼の住まいは、ベッドのあるハコほど広さの部屋一室に水洗トイレ付きの冷水シャワー室がある。入り口に簡素なテラスがあり、籐椅子がおいてある、典型的なロスメン構造になっていた。

話が弾んだ。彼は元海軍の機関士で、六年勤務した後リタイアして年金暮らしをしている。ベッドの上に大きなオランダ地図を広げて、ここに住んでいると言った。アムステルダムの西方の北海に面した小さな町である。その町からやってきてチャンディダサで二か月暮らし、明日帰国する。秋にはもう一度来る予定で、年間四ヶ月ここで暮らす生活が数年続いていると、笑顔で話した。

「私も今年から年金暮らしを始めたので、参考までに何故チャンディダサなのか教えてほしい」と、率直に訊ねた。彼はしばらく考えたあと、声をややひそめながら答えた。

「第一にチャンディダサの人々はすべてバリ・ヒンドゥ教の信者で他の人々と異なって大変マイルドである。第二にクタ等の大型リゾートと異なり、クワイアト（静寂）である。第三に米が常食で健康に良い。そしてさらに、年金暮らしに一番重要なことであるが、物価が安い」と、片目を瞑った。通常一泊五万ルピアが長期滞在者割引で三万ルピア（約四三〇円）にしてくれるという。

私は以前オランダの北の堤防を見学したことある。雲が低く垂れこめ、十月と言うのに寒々とした風景が広がっていた。あの地からこの地で暮らす“老人”的気持ちが良く分かる。

「それでは、散歩を続けます、さようなら」と、長身の背をやや丸めてラグーンの畔へ出掛けた。私は八年後の自分の姿を重ね合わせながら見送った。

その後私は、チャンディダサ寺院の参拝とその前に広がる蓮池のラグーンを一周する朝の散歩を終えて、私のロスメンへ帰った。

テラスの大きなアンチークテーブルへ、スタッフが、トースト、卵料理、紅茶、フルーツの簡素な朝食を運んできた。茅葺の小屋に見えるがオーナーのドイツ人は、アンチーク家具を商う人だけに万事凝った造りである。

お湯は無くシャワーのみ。二階建てで一階にはツインベッド。二階はダブルベッドと大型ソファ。私は二階の半分を整理して臨時のアトリエとして使っている。二階のアトリエから眺めると、広い椰子の樹の庭園の向こうにチャンディダサの青い海が見え、堤防に砕ける白い波が光る。広大な海辺の椰子の庭にコッテージが大小五棟点在するだけだ。テレビや電化製品が何もないが、この野趣が私の好みに合っている。

この宿は、当初の計画に無かったが、虧になって四年目の二〇〇三年の三月のある日の夕方、チャンディダサ寺院を詣でた。

「なぜ今朝は来なかったの？」と、なじみの係のおばさんが詰問した。私はテンガナン村の結婚式に招かれた事情の説明をすると、頷いた。彼女はサロンを私の腰に巻くと、お供えの花を用意し、線香に火を付けた。私を促して階段を登らせると、祭壇の前で、私の頭上に聖水を振りかけた。おばさんの心使いでまた御利益を頂けそうだ。

祭壇の下で二人の白人女性が私を食い入るように見つめている。祭壇の上からサロンを巻いた日本人が聖水の器を持ったおばさんを従えて降りてきたのが、かなり異常に見えたのかも知れない。



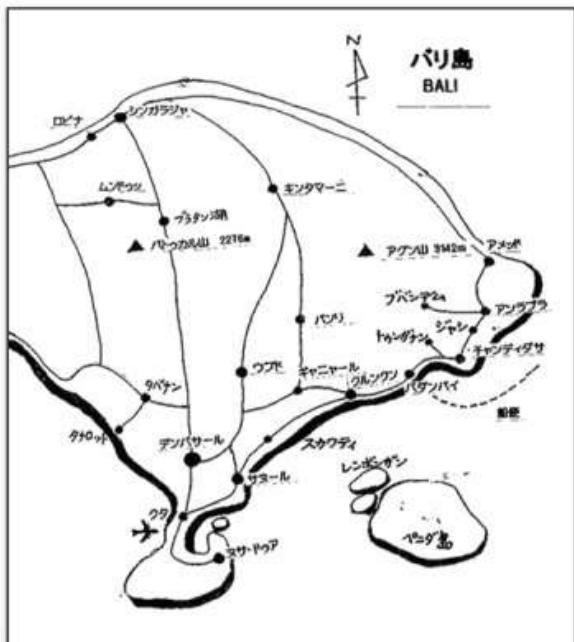
「イット、イズ、シークレット！」
と、若くて小柄な白人女性に耳元で囁いた。
「何が秘密ですか？」
「お参りすると、大きなプレゼントが頂けます！」
「何を下さいますか？」
「お金やダイヤモンドではありません。もっと
メンタルで大切なものですよ！」

眼を丸くした小柄な女性は、隣の大柄な女性に早口で説明した。大柄な女性の眼はさらに大きくなつた。

私は蓮池の周りを散歩した。遠くに見える寺院の祭壇の階段を、聖水を持ったおばさんを従えて、サロンを巻いた白人女性二人がしずしずと降りてきた。



チャンディダサ・ビーチ 風景



チャンディダサ寺院 風景



6. コロナ禍でも私のライフワーク… なのかな？

会員 鈴木 信之

当NPOの会員になって、はや13年余りが過ぎました。とうとう今年は7月に後期高齢者となります。正規のサラリーマン生活は13年3か月前に退職、完全年金生活者となって、もう2年経ちました。ほんとうに月日の経過は早いものです。

道楽というか現役活動中の演劇出演も、このコロナ禍では思うに任せず、体力や声の衰えを感じるので、年に1~2回程度と遠のいています。

そんな老境ともいえる私が、現在もまだやりがいとしていることは、「外国人に日本語を指導する」ということです。私は自分のライフワークのつもりで、毎週土曜・日曜に継続的にボランティア活動として行っています。そんな今を書いてみたいと思います。

私のサラリーマン生活の最後は55歳からで、外国人に対する日本語教育専門の出版社兼書店でした。日本語学校等への営業、更に書店店長を合計7年半務めました。当然のことながら就職前から始めた日本語教師養成講座を1年がかりで卒業し、日本語教師としての資格も得ておりました。

この会社を62歳で退職後も、高校生の進学広報会社の外国人留学生進学支援事業設立の顧問として9年携わり、並行して日本での就職を志す留学生にビジネス向けの日本語の仕上げ指導を行う教師として、二つの日本語学校で合計5年半、教鞭をとってきました。

こうした経験を基に、退職直後から取り組んできた日本語ボランティア活動は、すでに今年14年目を迎えるに至ったのです。

私の日本語ボランティア活動には、二種類があります。

まず一つは、留学生以上の成人の外国人に対して日本語指導をする活動で、これは退職直後から始めたので、既に満13年を超みました。代表者としても10年以上務めています。

もう一つは、成人向けの教室を始めてから6年後に開けた、外国人の小中学生に対する学習支援教室の運営です。こちらももう8年目を迎えました。開設以来、副代表を務めています。

いずれも、私が6年前まで住んでいた、東京都北区の「北とぴあ」というところで、「NPO北区ボランティアぷらざ」のスペースをベースとして活動しています。

成人に対しての教室は「飛鳥にほんごファミリー」という名称で、毎週土曜日の午前中にやっています。この13年間に開けた外国人は延べ数百人、いやもっと多いかもしれません。

この教室のモットーは、支援者も学習者も無理せず自分の都合や予定を優先することです。教室の運営も、一人の支援者と数名の学習者がレベル別に小グループを作り、面と向かい合って日本語だけの会話中心のレッスンをゆる~い感じで行う、ということだったのですが、二年前からのコロナ禍以来、あまり悠長なことを言っていたれなくなりました。

まず、教室の机と椅子の数が限定され、当然人数制限せざるを得ないので参加は事前予約制としました。指導スペースはそれぞれにアクリル板で仕切られ、マスク越しなので更に声が届かず、1対1の個別指導にならざるを得ません。





1対1ということは、支援者の数と学習者の数が、毎回揃わないとまずいということです。折角来ていただいた支援者が学習者不足で無駄足を踏むことになったり、以前のように予約もせずに呑気にやってきた学習者を追い返す、という嫌な思いをしなければなりません。

この二年間は、面倒な人数合わせや教具準備などの雑用を、代表者である私が一手に引き受けやってきました。従って、折角予約したのに大寝坊して来なかったり、遅刻する外国人学習者には、心ならずも厳しくあたらねばなりません。

おまけに教室そのものが緊急事態宣言下では度々貸出禁止となり、その間は休止せざるをえません。それを、この二年間、何回繰り返してきたことでしょう。

現在は支援者としてやっていただける方が私を含めて15名、学習者は連絡用のLINEグループの登録メンバーが約40名です。学習者は帰国、転居、出産などで随時入れ替わります。

支援者で、教室のある東京都北区在住者は実は三分の一程度しかいませんが、学習者は80%近くが北区在住者です。このため墨田区在住の私を含めて遠路やってくる支援者に無駄足を踏ませたくない、という気持ちが強く、二年前のコロナ禍開始当頃は、いい加減な学習者にそ

の都度私は腹を立てたものです。最近ようやく私の想いも伝わるようになり、学習者からの連絡も密になりました。

支援者は現役リタイア組が約半数、あとは主婦だったり、現役の方もおります。やはり安定して毎週来ていただけるのはリタイア組の方ですね。それでも、コロナ期間中はご家族に基礎疾患のある方などが多いと、おやすみする方が多くなり、運営責任者として毎週頭を悩めます。



学習者の国籍は中国が最も多いのですが、最近は台湾やフィリピンも多く、そのほかバングラデシュ、ベトナム、ミャンマー、スリランカ、ネパール、アメリカ、韓国、タイ、モンゴルなど実に多彩です。変わったところでは最近来始めたスペインとアイルランドのハーフで、北区の高校で英語教師をやっている25歳の美しい女性もいます。また、中国から日本に帰化した女性が2名来ています。以前はアフリカのマラウイという国の人人が来て、その国の名前も場所も知らず、驚いたものです。コロナ禍のせいか、最近参加の問い合わせや希望者がとても増えました。

職業では、コロナ禍以前は留学生も多かったのですが、この二年間は極めて少数で、職業を持っていたり、主婦の方がほとんどです。コロナ禍で母国に帰ることもままならず、致し方なく日本に長期滞在せざるを得ず、そうなると仕



事しなければビザが出ない、但し仕事するにも日本語ができないと良い仕事に就けません。主婦でも子供の成長とともに、日本語ができないことを子供に馬鹿にされるのが辛くて学びたい、という方多くいます。

現在の学習者は、上述したように異国である日本で家族と離れて暮らす長期滞在者が多く、そのせいか芯のしっかりした方が多く、学習意欲も高いです。主婦では日本人のご主人を持つ方が、フィリピンや台湾では多く、名前が日本名で、あれっ、と思うこともあります。

そうした方に、以前、日本のどういうところが好きか?と聞いたら、あるフィリピン人女性は、電車のホームでこんなにきれいに並ぶ人々は、母国ではない。ある中国人女性は、日本の青い空が大好きです、故郷の重慶は一年中曇り空ですから、と話してくれました。

もう一つの、外国人の小中学生のための学習支援教室は、「Let's Study 北区学び場」という名称です。毎週日曜日の午前中にやっています。

この教室開設のきっかけは、今から8年ほど前の2014年頃から、上述の「飛鳥にほんごファミリー」の教室に子供を連れてくる人が、急に増えてきたことでした。正直、子供の存在はうるさいし、他のメンバーに迷惑をかけることも多く困っていました。

その頃、スペースを提供してくれている「NPO 北区ボランティアぷらざ」から、新しいボランティア活動の企画提案をしたいが、何かアイデアがないか?と私に質問がありました。これ幸いと「最近外国人の子供の在住者が増えている気がする。実態はどうなのだろうか?日本に適応する教育は行われているのだろうか?」と疑問を投げかけ、それがきっかけで北区に住む外国人児童・生徒への教育実態調査と、他自治体の状況などを知る連続セミナーとして企画され開催されました。

当時、北区での外国人居住率は約4%、児童・生徒のための公的な日本語適応教室は、区

内の小学校で二校、中学校は一校しかありませんでした。

これでは、満足な外国人の受け入れができるとは全く言い難い状況です。セミナー終了後、その受講生の数名が外国人児童の居場所作りを目指してこの教室を立ち上げよう、ということになり、受講生ではないが言い出しつつある私もその教室に引き込まれました。



外国人児童・生徒は成人の場合と違い、誰一人として自分の意志で日本に来たわけではありません。結局親の都合です。こうした児童・生徒たちが日本で成長し、長く生活していくためには、どうしても高校に進学する必要があります。義務教育は中学まで、とはいっても高校を卒業していなければ、大学や専門学校に進学できないし、ということは就職もままならないということです。



そこで教室の開始当初は高校進学優先ということで中学3年生を対象にしましたが、その後徐々に中学全般に広がり、更には小学生も来るようになりました。ただあまりの年少者は、教室へ来る途中や帰り道の安全性の保証ができないので、小学校三年生以上を対象としました。

現在支援者は約50名が登録していますが、「飛鳥にほんごファミリー」に比べて大幅に年齢層が若く、高校生・大学生・新入社員なども多いので、なかなか毎週安定した支援者を確保しにくいのが、大きな悩みの種です。

学習者はやはり数百名となるでしょう。国籍は、やはり圧倒的に中国が多く、バングラデシュ、ネパールなど。最近はミャンマーが増えってきたことも大きなポイントです。ハーフの帰国者で、インターナショナルスクールに通う生徒もいます。

コロナ禍で教室が開催できない期間は、ZOOM教室でオンライン指導を行い、休止期間が明けても、ZOOM教室とリアル教室の二本立てで進めています。外国人の家庭では、ZOOMできる環境にない子も多数いるので、リアルの教室は重要です。ただ、ほんとうはやはり教育というものは対面でリアルでやらないと効果が薄い、語学特に日本語指導ではオンラインはかなり困難です。



指導する教科は、小学校・中学校とも全教科にわたります。ただ児童・生徒は、自分の好きな教科ばかりやりたがるので、どの教科をどのくらいやるか、指導担当のさじ加減が重要です。小学校低学年から日本在住の児童・生徒は問題ないのですが、母国である程度の教育を受けてから来日した児童・生徒は、母国の教育指導要領と日本のものがかなり違うので相当大変なようです。

まず国語はとにかく勉強しなければなりません。これがある程度できないと、他の教科のテキストや問題文も読めないので、必須中の必須です。ただ児童の語学習得度は成人に比べて圧倒的に早いので、中学生までなら一年もすればなんとかなります。

算数・数学は、中国などは日本より早く学習しているようですし、逆にフィリピンは遅れているようです。ただ、日本語が読めなくても、この教科は公式や記号、図があるので大丈夫かもしれません。でも九九って実は日本語なのですよね。

英語は、日本人とほぼ同一線上で始められますが、できる子には指導する側がとまどうこともあります。

問題は理科・社会です。理科は国によって学習してきた内容やレベルがそれそれ異なることに驚かされます。例えば、中国の子はカツオ、マグロ、タコ、イソギンチャクなど海の生物はほとんど知りません。社会は、外国人児童・生徒が日本の地理や歴史、政治経済など知っているはずもありません。(中には、ゲーム・アニメなどで戦国武将を異常なほど知っている子もたまにいますか)

時には息抜きにイベントも行います。例えば年末には書初め教室もやり、児童・生徒にも好評です。一昨年末はコロナ禍でできませんでしたが、昨年末は実施し、年明け提出作品で優秀賞をとった子もいました、そういう話は、私たちも嬉しくなります。



こうした児童・生徒に日本語を基本にして学習支援することは、簡単ではありません。特に現在のコロナ禍では、学校のように支援者側と学習者側が同一の教材を持てない状態で、ZOOMによるオンライン授業を行うことは、至難のことと言ってもよいでしょう。でもコロナ禍だからといって、子供の成長は待ってくれないので、良い方法を編み出さなければなりません。

8年前に4%だった東京都北区の外国人居住率は、現在8%ほどまで増えています。その増えた中身をみると、子供たちがおとな以上に増えていることも事実です。公立小中校の日本語適応教室の数も、当時より倍に増えたようです。

現在コロナ禍で、外国人の入国も制限されていますが、アフターコロナでは更に増加することでしょう。ますます、私たちの教室の存在意義も増すことになるのでしょうか。

私の外国人との接点は、こうしてこれからも体力の限り続けたいとは思っていますが、頭を悩ますのは、後継者の問題です。電車で通えなくなるなど自分の体力が尽きたらそれで終わりかな?と思いつつ、折角育っている芽を、自らの手でつぶすのは忍びない、という気持ちがあります。

「Let 's Study 北区学び場」の第一期生、当時中学2年生の終わり頃だった中国人女性が、見事に高校合格後、現在は法政大学の新4年生となり、就職試験の面接で日本語の不足を指摘されたくないで自分の日本語力を磨きたい、と「飛鳥にほんごファミリー」に最近参加してくれました。私として『やりがい』を感じた時でした。

こうした活動を通じて日頃心がけていることは、成人対象であっても、児童・生徒対象であっても、同じ目線に立って「教えてあげる」ではなくこちらも「教えてもらう」姿勢が何よりも大切だということを、心に刻み、新しい支援者にも指導しています。

「飛鳥にほんごファミリー」を始めてから、初めて知った驚いたこと、それは日本与中国では「独身」という言葉の意味が違うということです。日本では「独身」は結婚していない人のことですが、中国では結婚していないくとも、彼氏彼女がいれば、独身ではないのだそうです。

こうした文化の違いは、そこかしこに知ることができ、こういう基本的な文化の違いを理解せずして政治・外交面でも他国との友好・協調などありえない、と思われます。外国人居住率という面で、日本は世界の中でも極めて低いと聞いています。それだからこそ、コロナ禍でも日本に住み続けている貴重な外国人たちに、私たちはいろいろ学ぶべきではないか、とつくづく思います。

外国人一人一人が日本に来た事情はそれぞれ違っています。それを画一的に理解しようとするのは無理な話で、だからこそ同じ目線でコミュニケーションすることが何よりも重要であり、そうすれば日本自体ももっと良くなると、強く確信しています。

そして今、私が願うことは、一日も早くコロナ禍から脱却し、アクリル板の仕切りが外され、コロナ以前のような、外国人の誰もが自由に参加できる教室になることを祈っています。

最後に、私は数年前までリタイアメント情報センターのりらいふサロン担当として、特に「日本語教師志望者のための得する話」というのを、毎月一回開いてきました。その参加メンバーが数名、私の運営するボランティア教室に、支援者として参加してくれました。

これは実に嬉しいことで、同時にリタイアメント情報センターにも心から感謝する次第です。

以上



7. 北米行きの契機

会員 赤神 潔

1966 年の夏、私は先に大阪を発ちマツダ・ファミリアを運転し北陸、新潟、八郎潟干拓農地近編を通り、青森まで行き、大阪から寝台急行で来る妊娠 7 ヶ月の富美子と合流した。青函連絡船で北海道へ渡り、1 ヶ月の予定で、百科事典の販売活動中、網走辺りでミンク場を見かけた。日本ミンクか、大洋ミンクだったようだ。札幌郊外の空港近くにシャイン・ミンクというのもあった。いずれも大きな規模で、どちらかと言うと外見は農場と言うより、背の高い板塀の中の大きな建物の建ち並ぶ大工場と言った感じで、広大な大自然の中の一般的に余り塀のない農業地帯には異様に思えた。お願ひして中を見学すると、「元々ミンクは肉食動物で、小動物、鳥類、魚類等狩りをしていたため、家畜になった今でも、籠の中で飼っていると、音を立てず死ぬまでただ走り続けてしまう。空腹になっても、草食動物の牛や羊のように『もうもう』『めーめー』鳴いて餌をねだらない」そうだった。医学書房を始めてからも、うちのセールスマン達がたいして努力もしないで、夕方には必ず盛り場へくり出して飲み歩き飲み屋に借金を作って、「ぴいぴい」言って助けを求め、うるさいのに飽き飽きしていた私は、突然ミンク・ビジネスに惹かれた。

農場を経営すれば、富美子や子供達と何時も一緒に、猛烈なマイペースで独自な人生がたのしく送れるではないか。北米の白人がミンク飼育に一生を掛ける以上、それなりに経済的にも恵まれ意義があるはずである。当時、日本で、普通のフルサイズ(メス皮 60 枚使用)のミンクのコートが一着 300 万から 600 万円、中には 1000 万円を超えるものもあったので全力で挑戦する価値十分ありと思った。

高校時代を教員の兄の家族と過ごした奈良県山辺郡都祁村は、標高が高く、夏は涼しくて 30 度を越えることが少なかった。同級生の助けもあって小規模ではあったがミンクを飼い始めた。



北海道のミンク飼育者間には『ミンク・インク』。日本の毛皮業界には『毛皮新報』(後程、毛皮ジャーナル)という小さな業界紙が月 1 回出していた。米国には週刊の小さな業界紙『ファー・エイジ・ウイークリー』の他、『ユース・ファー・ランチャー』と言う A4 サイズの立派な業界雑誌が月刊で出していた。後程、これらの出版物は私たちのミンク・ビジネスのバイブルになった。

私は、英語で意思の疎通はなんとか出来る。試行錯誤は楽しい方で、苦にならぬ。北海道でミンクを飼うより、世界の最高級ミンクを生産するミンクの原産地の北米に乗り込みたい。日本人が北米で合法的にミンクを飼えるのか?

1971 年、クリスマスの頃だったと思うが富美子の実父が一人で大阪から奈良県山辺郡都祁村の我々の家に遊びに来ていた。座敷で孫達と戯れながら、毛皮新報を見ていた実父は、『カナダと米国の数軒のミンク飼育業者が眞面目な日本人のマネジャーを求めてる』という広告を見つけ、私に「潔くん、この広告に興味はないか」と聞いてきた。富美子の実父は昔、太平洋戦争の直前、富美子の母親と結婚するなり、大志を抱いて 2 人で満州に渡った経験の持ち主で、『未知の世界にチャレンジする魅力』の理解者だった。

百科事典のフル・コミッショナ・セールス(固定給なし)を始めた頃は、歩合だけで給料のない不安と、大企業に属していない自分がどんどん世の中から取り残されて行くような錯覚を覚えたが、そのうち徐々に時間が経って、百科事典が簡単に売れ出すと、『1 日頑張れば、何とかなる』という



図太い自信がなんとなく出来はじめた。そんなこともあって、『富美子と子供 2 人の 4 人家族だけが見知らぬ外地を試行錯誤しながら手探りで、しかし、全力で生きて行く』という考えに強く惹かれた。「勿論、米国行きには興味はありますよ。大ありですよ。しかし、——」当時の私の念頭には年老いた富美子の養父母のことが立ち塞がっていた。

富美子は小学校の頃、母を失った後、実父が再婚する際、先方に同じ年の女の子が 1 人いたために、(年齢が幼少で無理であったが特別に) 土地の有力者の仲介で亡くなつた母の子供のいない姉夫婦の養女となり、その養父母が、その当時、良譲と淳子、2 人の孫が出来て大層はしゃいでいた。

「浅田の父母のことを考えると、米国行きなど、今は全く考えられない」と、私はうつろな目を向け、富美子の実父は、「それでは、俺が浅田の両親の面倒を見る」と、私の目をキラリと見上げた。私は横にいる富美子に、「浅田の両親にどう言おうか?」と、腫れ物に触るような気持で、振り向いて聞くと、富美子は直ちに「そんなこと、私、養母が可哀想で絶対に言えません。アメリカへ行くなら、黙って行くから、北海道にセールスにでも行っていることにして置いて欲しい」と、実父を見て即答した。富美子はどちらかというと養母っ子だった。その時、私が 29 歳、富美子 28 歳、良譲 5 歳、淳子 2 歳だった。ある親戚の者に、「どうして、遠い外国へまで行かねばならないの?」と、聞かれて、「誰も知人のいない外国に自分を置くことに依って、背水の陣で、日本国内で頑張るよりも、より 1 層、真剣に頑張れるように思える」と、ハッキリ答えたことを覚えている。その親戚は、「でも、赤神さん!」と言い、口を開いたまま数秒間、私を見上げていた。

そのような重大な会話があつてから、凡そ 4 カ月半後、1972 年 4 月、私はヴァンクーヴァー空港に藍色の背広にネクタイ姿、小さな赤と黒のチェック模様でキャンヴァス製のスーツケースを片手に、一人で降り立った。到着ロビー中央出口の隅の方で、全くの未知の北米世界を、丁度、セールスで初めてのお客に会う直前のような(自分で、自分に暗示に掛け、既に、その販売に成功した) 気持で冷静に見つめて、腰を何度も伸ばしな

がら、胸を張り、深呼吸をし、仁王立ちになつた。

日本から北米東海岸・ニューヨークまで、往復約 32 万円(約 \$900.00)。当時、外国旅行が一般的に制限されており、まだ外国旅行案内書等が本屋の店先に目立たない頃で、持ち出し可能なお金は一人 1800 ドルか 2000 ドルと制限されていた。2、3 年前の百科事典販売会社社長ジョージさん、ダンさん両夫妻の単独世界一周旅行の経験話だけが、唯一身近な海外情報だった。

その晩泊まるホテルを探さなくてはならない。その当時は、公衆電話に無造作に鎖で吊るされた電話帳だけが頼りで、今のような町中のホテルが一目で分かり、簡単にボタン一押しで望みのホテルへ電話できるような便利な案内板が何処の空港にもなかった。それとなくきょろきょろしているうちに、私より少し若そうで背広を着た真面目そうな、太りぎみの白人青年紳士ビジネスマンを、別のゲートから出て来た客の中から見つけて、「ホテルを探しているのですが?」とじっと目を見続けて聞いてみた。幸い彼は快く「私はホテル・ヴァンクーヴァーへ行くから、そこで良ければ一緒に行きましょう」と言って、シャトル・バス停まで案内してくれた。その時実は、ホテル・ヴァンクーヴァーの名も初めて聞いたのである。ホテルの前で皆が自分の荷物と引き換えに、小銭のチップをシャトル・バスの運転手に差し出すのを見て、私が 1 ドル札を渡すと、彼はそれを見届け、「お金はホテルのロビーに銀行があるから、そこでカナダ・ドルに換えれば良い」と教えてくれた。

ホテル・ヴァンクーヴァーは、どこか鄙びた部屋の雰囲気が、我々が特に好きだった小樽の北海ホテルに似ているようで嬉しかった。古くてきれいに摺減って木目が浮き出た床に、ちょっとくすんだ真鍮の何も飾り気のない蛇口が歴史を思わせ、小樽にいるようで 1 層印象的だった。つい調子に乗って、部屋まで案内してくれた小柄な少年を取ったボーイに、「貴方は、どこの国から來たの?」と聞くと、「私はギリシャから來ました」と言った。「日本ではチップを払ったことがない。幾ら位が良いのだろう」と聞くと「幾らでも結構です、貴方次第です」と言った。幾度か同じ押し問答したあげく、非常に控え目に、『貴方次第です』



を我慢強く繰り返すので、つい嬉しくなって、今はもう覚えてないが少しはすみ過ぎたようだった。

ボーイが帰って一人になると、英語で意志が難なく通じて嬉しかった。すると、急にひもじくなつた。さて、スナックに何を食べたら良いのか？夕食の料理名を英語であれこれ考えてみるが全然見当がつかない。当時、北米のファースト・フードなど、日本に1つもなかったので、いつも日本で外出すると、にしん蕎麦か、鍋焼きうどんか、ラーメンなどだった。高級西洋レストランは高い上に気を使うので、どちらかと言うと避けていた。

部屋の窓から、暫く通りを見下ろしているうちに、だんだん不安になってきた。ホテルの回りの通りには、今とは違って東洋人の姿が余り見当たらなかった。防衛大学校で一応、社交ダンスや食事の作法は習っていたが、出発前には想像もつかなかった試練が起り始めているのに、ふと気付いた。『皆、いったい夕食に何を食べているのだろうか』

確か、富美子がそれとなく入れてくれた即席麺のチキンラーメンを慌ててスーツケースから探し出した。例のくすんだ蛇口から、熱いお湯の出て来るのを待った。お湯が沸騰していなかったので、半生のラーメンを食べ終わると、たちまち眠気が襲って来て、知らず知らずの内に背広のまま寝てしまった。

明くる日、フロントの前のベル・ボーイに、恐る恐る「ラングレー市までタクシーに乗ると幾らかかりますか？」と頭の中で用意した英語で聞くと、「とても高く付くので、バスで行くことをおすすめします。バスは近くのバス・ディープから出ていますから、バス・ディープまでタクシーで行かれると良いでしょう」と、目を見開いて、とても朗らかで親切なので、断れなかった。セールスが旨く行きだして自家用車に乗り出してから、バスや電車には乗ったことがなかったので、バスは不馴れで不安だったし、内心、私は幾らかかっても、タクシーの方が簡単で間違いなく行けるのだと、思ったが、言われるままに調子に乗って、タクシーにのり、バス・ディープでバスに乗った。百科事典の販売活動の時はタクシー代や飛行機代は気に成らなかつたが、2000 ドルに制限され

た海外旅行で節約することにした。ラングレー・イン前のバス・ストップまで來ると、曇過ぎになってしまった。慌てて、日本から持つて来たぼろぼろの求人広告の中のニルセン宅に電話を入れた。ニルセン夫人が電話に出て、とても驚いて、「わざわざ日本から来てくれたのにどうしましよう。今日は、ノールウェー人会のボーリングの試合の日で、どうしても、試合には欠席出来ないので」と申し訳なさそう。「明日会いましょう」と約束し、その日はラングレー・イン泊まりとなった。

朝日が覚めると10時過ぎだった。昨日、ホテルの食堂で買って来て嫌々食べた、乾いて冷たく固いサンドウィッチが、少な過ぎてカロリーが十分ではなかったのかも知れない。普段暖かい食事に馴れていたので、冷たく乾いたパンの感触は、私の喉には堪え難かった。それともそのサンドwichが流感に汚染されていたのか確かではないが、高熱と頭痛、関節が痛んだ。起き上がりず、うとうとと、また寝てしまった。

午後3時頃、ヒスピニック系のメイドに起されて、朦朧とした頭で、「風邪を引いて動けない。何が沈痛剤はないですか？アスピリンの持ち合わせはないですか？」と聞いたら、「ホテルから2、3分のところにロンドン薬局があるから、そこへ行って自分で買いなさい」と冷ややかに突き放された。しかし足腰がふらふらで、第1、頭がガンガン痛み簡単に起き上がりず、目の焦点が上手く合わず真っ直ぐに歩けない。手を伸ばして壁伝いに歩いて、目をつぶり、しゃがみ込んで臭い胆汁をかなり吐いた。通りがかりの人が助けようと近寄ろうとして、私のヒゲ面を見て、（インディアンの）麻薬常習犯くらいに思ったのだろうか、躊躇するのを背後に感じた。喘ぎ喘ぎ歩いた私には2時間近くかかったようだった。アスピリンとコークを1缶買ってベッドに戻るともう辺りは暗かった。

次の日、私がラングレー・インにいると分かると、15分もせずにニルセン夫人がベージュ色の車、クライスラー・ニューヨーカーで迎えに来てくれた。知的で控えめな長身でブロンドの北欧美人で、車中で僅かな会話の後、突然、「今、家を新築している。それが完成すれば、今、私達の住



んでいる家に、家族を呼んで住めば良いでしょう」と言ってくれた。主人はアイビンといい、奥さんはキャレンだ。10エーカーの農場で、30棟程のミンク小屋が整然とならんっていた。ミンク飼料用の冷凍庫は300トンで、ミンク小屋の屋根材は鋸びたトタンではなく全てピカピカのアルミニーム製だ。家の前のドライブ・ウェーはアスファルト舗装され、その脇にトレーラーに載せられた、大きなレジャー・ボートがあるではないか。

2人共1世で、結婚後間もなく、先に、カナダへ来てミンク飼育場を経営していた奥さんの伯父さんを頼ってやって来ましたが、当初は英語が分からなくて困ったそうだ。「仕事は伯父さんのところだからノールウェー語でよいが、休みの日に2人で町に出て、コーヒーショップでコーヒー2カップと1切れのケーキを英語で注文するのが大変だった」と言った。アイビンはノールウェーでトップ・クラスのスキー・ジャンパーだったが、『伯父さんのいるカナダへ行けば、大好きなミルクが好きだけ飲める』と聞いて、カナダに来る気になったそうだ。2人とも外国から来たての私の気持ちは良く分かるようだった。アイビンは非常に気さくで働き者で、後ほど、私と2人で何か持ち上げる時など、知らぬ間に彼は必ず重たい方を持ち上げていた。それが身に付いて嫌みがなかった。私がそれに気が付いて、以後、慌てて重たい方を持ち上げに行くと、何時も2人が先を争ってぶち当った。面白いゲームだった。

午後に、ホワイト・ロックの海岸通りと、ピース・アーチ公園へ連れて行ってくれた。ホワイト・ロックはその当時、鄙びた臨海村といった感じで、ヒッピーのうろつく余り、パッとしない場所であった。海に面した通りに、フィッシュ・ン(アンド)・チップスを売っている小さな屋台が出ていて、この時初めて、フィッシュ・アンド・チップスと言う食べ物があることを知った。アイビンは、「この辺りで、1番美味しいフィッシュ・ン・チップスの店だ」と言った。そして「この海の向こうに日本があり、水平線のほんの少し向こうの隣の国だ」と言い、太い指で夕日にしては少し早く思える赤く染まった、ハッキリとしない水平線を指した。「日本の国はそれ程近くにはないです」と言うと、アイビンは東の空を指し、「ノールウェーはこの大きな大陸を超え、大きな大西洋を超えた向こうで、

日本はノールウェーより近い」と言い笑った。

後程、分かった話しだが、彼等はその19年前に、汽船でノールウェーからイングランドのハンブシャーまで行き、そこからリヴァプールまで汽車に乗り、そこからハリファックスまで汽船に乗り、その後汽車で16日も掛けて、この大陸を超えて来たそうだ。しかしお互いに熱愛中だったので、その16日間は全く苦にならなかったそうだ。

「ピース・アーチ公園はアメリカンとカナディアンの共有の公園で、国境を示す白いコンクリート製の目地と、白い大きな記念門と黒い鉄製の扉は中程にあるが、両国の独立以来、その扉は閉められたことがない」と教えてくれた。もちろん、公園の中の両国の境界には柵がない。私は記念碑を見付けて説明文を読み始めたが、奥さんはすらすら読めるが、アイビンは読むのが億劫なようであった。アイビンの驚く視線を感じて、私はこの人達なら大丈夫だと直感した。彼等の基礎ミンク(種メス)の数は当時約1500頭で、「もし前が来てくれるなら、来年から基礎ミンクを増やして、2000頭にしても良い」とアイビンが意気込んだ。私は「間違いなく永住権を取ってくれることが希望事項で、給料は家族4人の住む家があればどうでも良い。移民局への申請や嘆願書は私が代わって書くので、ただ、それにサインしてくれれば良い。将来、我々は、貴方達夫妻のように、此処でミンク飼育場をすることが目的だ」と言った。

彼らの生活ぶりは見たところ悪くなく、これらも頑張れば“十分同じ位はやれるぞ”と家族の移民、ミンク・ビジネス設立、発展、展開の可能性を直感で確信した。

2日後、『働くかどうか』の返事を保留して、ヴァンクーバー空港からワシントン州のシアトルへと向かった。もう1人の求人先、スノホミニッシュのミンク・ランチャーMさんに会うためであった。

翌日、Mさんがシータック空港まで送ってくれて、私はニューヨークのケネディー国際空港へと向かった。ニューヨーク市のマンハッタンにある世界の毛皮産業の中心『毛皮屋さんの街』と、当時その中心にあったハドソン・ベイ・オークショ



ン会社へ行くため、将来、ミンク・ビジネスを目指す以上、絶対に自分の目で見て置きたかったからである。

空港からタクシーに乗った。どう見ても、マンホールから吹き出す蒸気の具合と、黒人が箱を積んで押す手押し車や、沢山の毛皮のコートが吊られた掛け棚の歩道に放置された様子が、同じ街路をまた通っているように思えた。私が窓の表を注意して見出すと、バック・ミラー越しに私の視線の動きを見た白人の運転手が神経質になり、「昨日は雨だったが、今日は、晴れて良かった」などと喋って右手を大げさに振り向し、私の視線を自分に引き付けて、ごまかそうとした。名前を見つけて、「お前の名前はバナードと言うのか」と聞き始めた時に、左手にスタットラー・ヒルトン・ホテルを見つけたのでそこで降りた。予約はしてなかったがチェック・インして、部屋まで来たボーイにチップを渡した。ボーイが、「もっとチップをくれ」と催促した。タクシー・ドライバーも、ボーイも、ヴァンクーヴァーよりもうんとそれでいるように思えた。よって、英語が分からず振りをして、握手をして、彼の手を両手で握ったまま、出来るだけゆっくりと丁寧に扉の外へ圧力を掛け、笑い乍ら追返してやった。

マンハッタンの或る毛皮屋さんに、日本人の毛皮ブローカー兼、種ミンクのブローカーがいた。日本の毛皮新報で見つけて、私が頼りにしていたミンク・ファーマーの求人広告は彼が自分のお客様のミンク・ファーマー達に頼まれて、”頼りになり（英語が喋れないため）長く、安く使えるヘルパー”を求めて、親切に出したものだった。彼とは別に増田君という、当時独身の若者がそこで働いた。ある日、日曜日だったと思うがコネティカット州のどこかの、彼の懇意な或るミンク飼育場を私のために一緒に訪れるこにしてくれた。朝、レンタカーを借りる段になって、私が借りて私が運転することになった。運転は日本国中走っていたので、別に問題はなかった。ただ、高速道路がやたら多く、フリー・ウェイか、スピード・ウェイか、ターンパイクかの車線の数が、確かにないが片側で10車線ぐらいあるのがあった。しかも、特に気が付いたことは、日本に比べて料金所の係員の動きが揃ってスローで無愛想であった。予め、行く先が頭に入っていて用意し、

注意しないと、急には思った方向へスマースに出で行けない。行動が遅れると、とんでも無いハイウェイへ持っていくられる。私は英語が好きだから、地名も道路サインも、早めに直ぐに読めた。車線変更はお手のものであった。しかし、のんびりドライブしているアメリカ人を無闇に刺激したくない。道案内は増田君の受け持ちだ。彼はニューヨークに数年住んでいるのに、地図を手に持って少し困っているようだった。いつも、プロンクスからマンハッタンへ地下鉄通勤だから無理もない。どうりで、私がレンタカーを運転することになった訳だ。私は車を直ぐ買おうと思った。

その夜、彼のアパートへ行って泊まることになった。もう5月近くになって、暑い日があると言うのに、夕方になると彼の住んでいるアパートの前で、毛皮のコートを平気で着ている女性がいた。増田君から、「グリーン・カードを取って、ニューヨークで生活していることが分かると、沢山の日本人の女の子が『何をしてもいいから、アメリカに留まるヴィサ(査証)を取る手助けをしてほしい』と言い寄って来る」と言うことを聞かされる。「女には男にはない最後の強力な奥の手がある。」そうだ。「赤神さんは男だから屯でもない苦労を覚悟しなければならない。赤神さんの泊まっているスタットラー・ヒルトンの横の路上で、日本人の旅行者が、最近、大きな黒人達に囲まれ襲われて大けがをした。その旅行者は柔道数段でしっかりした人だった」そうだ。「赤神さんは体が大きいから大丈夫と思うが、もし大きな黒人達に囲まれて、お金を要求されたら、用意しておいた小銭を周りのストリートに一杯バラ撒いて、戦わずに逃げるのが利口だ」と教えて呉れた。

朝、ホテルから増田君の勤めている毛皮屋さんに来て、回りの毛皮屋さんや鞣し屋さん、ミシン屋さんや裏地屋さんなどを訪ねて、ぶらぶらしていると、その内ミンク飼育業者が来た。大きな規模のミンク飼育業者が訪ねて来たら、増田君に紹介して貰うこととした。食べ物はチャイニーズかギリシャ料理が口に合い、どちらにもライスがあった。『これなら何とか生きて行ける』と思った。



2週間ほど経ったある日、1人の恰幅の良い老紳士のミンク飼育業者が現れて、増田君の働いている毛皮屋の社長さんが私に近づいて来た。「彼の名前はラルフ・スペースさん、トップ・クラスの大物です。近づきに成った方が良い」という。早速、自己紹介をした。「私は日本で士官学校に行ったが、ミンクに取り付かれました。この、世界のミンク・ビジネスの本場でもっとミンクに付いて勉強したい。どんなに苦くても、音を上げないから使って下さい」と頼んだ。彼はただ何も言わず、難しい顔付きで、急に奴隸商のように私の肩から肘にかけての二の腕辺りを片方ずつ両手で何度も掴んで見て、筋肉の付き具合を調べる様子をした後、わざとらしく目を大きく見開いて、にこにこし始め、頷きながら、「よし、今度の日曜日に私のファームへ来い！」と言った。

ヒルトン・ホテルの近くのペン・ステーション(駅)の横からバスで1時間以上もかかって、ニュージャージー州のニュートン市に着いた。バス停の横の公衆電話から直ぐに「今、ニュートンのバス停に着きました」と知らせると、日に焼けた赤ら顔でがっかりとした体格のフレッドが黄色と焦げ茶色のゆったりとしたフォード・ステイション・ワゴンで迎えに来た。そのナンバー・プレートが、ニュージャージー州 001 番だ。頭から足の先までアイロンの利いた新調のサファリ・スタイルであった。グレゴリーペックやクラーク・ゲイブル主演の猛獣狩りの映画から、そのまま出て来たようなカーキ色の広い鍔の帽子にカーキ色上下、肩に緑の草原に囲まれた焦げ茶のバッファローの絵とスペース・ファームスと書いたワッペン

が付いていた。靴は頑丈な半長靴。5月だというのに半袖にショートパンツ。胸にはスペース農場主フレッド・スペースとあった。車から出てきて、私と目が合うと気持ち良く笑いながら、大げさに目をむいて両手を広げて抱き付いて来た。このように他人に抱きつかれたのは生まれて初めてだった。



ラルフは75歳で、「全てミンクで築いた」と言うスペース農場と博物館はとてもなく立派なもので、440エーカーのコーン・フィールドに囲まれた農場だった。世界でトップ・クラスのミンク毛皮を年間4万枚程出荷している。その他に、乳牛が180頭の最新式でフル・オートメイションの牧場、デパートをしのぐ規模のミンク毛皮コートショップ。大きなみやげ物店と広いレストラン。500頭以上の野生動物の動物園(当時北米1の規模の私立動物園)。クラシック・カーのコレクション、アンティーク・トラクターのコレクション、アンティーク・モーターサイクルのコレクション、アンティークの幌馬車のコレクション、インディアンの遺物コレクション、世界の人形のコレクション、アンティークの時計のコレクション、アンティークのオルゴール(ミュージック・ボックス)のコレクション、アンティークのガンのコレクションどれもこれも半端じゃなくそれが立派な博物館になっている。夏場は毎日、スクール・バスが約50台、観光バスが40台ほど、勿論、何百台もの自家用車も来た。敷地の中に消防署、教会があり、「ビーマーヴィル村が大部分スペース農場だ」と言っても過言ではないだろう。

ラルフを筆頭に、フレッドが50歳前後、ワイオミング州立大学の学生エリックが20歳、その下にハイスクールに行っている女の子ロリーとルネーが2人、最後にパーカー、私の息子と同じ5歳だった。



スペース農場・博物館・動物園に着くや否や、動物園やレストラン、ギフト・ショップ、博物館に続く、メインビルディングの入り口前の人混みを泳ぐように搔き分けながら事務所に入り、直ぐ飛び出して来て、フレッドが「ジミー。今からラトル・スネーク(ガラガラ蛇)狩りに行こう。ジミーも一緒に付いて来い！」と言い、使い古して汚れて少し臭い、ガニ・サック(ドングロス袋又はジュート袋)を1枚渡された。ロープ、ワイヤの切れ端、石、材木、チェーン、ハンマーと大工道具、シャベルとつるはし、ヘイ・フォーク、動物の餌の残りの散在した、古びて色あせた赤色屋根なしのジープに2人で飛び乗った。ビーマーヴィル村の西方に、南西に伸びるアパラチアン・トレールという断層の亀裂跡が何キロも剥き出しになって、半径が人の2倍以上もある大きな岩がゴロゴロと沢山散在している所がある。フレッドが「ラトル・スネークはその岩の上で日向ぼっこをしながら昼寝をしている」と言い、岩場に着くや否や得意顔をして、慣れた足付きで岩から岩へと渡り歩いて蛇を探し始めた。1メートル程のスティック1本を操って、素手でラトル・スネークの尻尾を捕まえて、彼の後を追う私が口を括げているガニ・サックに頭から入れ、私が速やかにその口を手で締めるのだ。蛇が袋の中で立ち上がって、閉めている私の手の方に登って来ると、「蛇に噛まれないように袋を振り回せば良い」とウインクする。それまで私はラトル・スネークの猛毒について聞いたことがあったが、本物の毒蛇を見たことがなかった。全く経験のない私は、背広を着たま

ま、黒い普通の革靴(ドレス・シューズ)で、岩の上を滑りながら遅れまいと必死に彼に続き、恐怖と、油汗でびっしょりになりながら頑張った。5、6匹長くて重いラトル・スネークを捕ると、張り切っていたフレッドが少しづつ落ち着いて来て、親指と人差し指で輪を作つて、にこにこしながら甲高い容赦ない早口でまくしたてた。息を弾ませながら、「ジミー、お前は合格だ！」と言っているようで実にうれしそうだ。彼は私の性質と能力を彼の最も得意なラトル・スネーク狩りで乱暴にテストしたようだった。帰り道、フレッドが「コカコーラを飲もう！」と言ってドライブ・インに立ち寄った。手渡されたコークのカップ(約1リットル)が馬鹿でっかい。胃袋が一杯になって、それでも、『せっかく御馳走に成った物を残しては、申し訳ない』と思いながら、喉から溢れ出て来るのを、目を白黒させて困っていると、にこにこして「コークの入っているカップが日本人には大き過ぎるだろう？」と、得意顔で言いながら、私が口を付けて飲み残した分まで平気で全部平らげて満足そうだった。事務所に戻るとラルフとエリノアが待ち構えていて、フレッドが即座に我々のグリーン・カードの申請を受けた。

敷地内を通り抜けるメイン道路沿いに何軒もスペース所有の家や農園、動物園、博物館、教会、消防署、パーキング・ロット等があり、ラルフの隣、フレッドの筋向かいの2階建て、フル・ベースメントで茶色の切妻作りの白い家が我々の家となった。

2日後、私はマンハッタンのスタッター・ヒルトン・ホテルへ帰った。それまでに15日間程滞在していたし、チェック・アウトもしていないし、何時ものように部屋にはまだこうもり傘とセーターと数点の小物が置いてあった。第一、スペース農場へ行っても、直ぐに気に入られて雇用される確証がなかったからだ。その日は、そのホテルに泊まって、次の日、紹介してくれた増田君のいる毛皮屋の社長さんに丁寧にお礼を言い、雇われることになった報告をしてから、チェック・アウトするつもりだった。驚いたことに、ホテルの私の部屋にはもう別の白人男性が何食わぬ顔で泊まっていて、フロントへ行って聞きだすと、「今宵は非常に混んでいて、空き部屋がなかったので、あなたの部屋は空だったので、あなたをチェック



ク・アウトした」と言い出した。初めは私がチェック・アウトしていないのに、彼らが『私をチェック・アウトした』と言われて、日本のホテルや旅館には人一倍多く泊まって来たが、そのような経験は初めてだったので、少し声を荒げて、「何時ものようにまた荷物が置いてあった筈だ！」と食い下がると、「紛失物なら角を曲がった向こうのロスト・ン・ファウンド(紛失、落とし物係)へ行って、文句を言え」と、早口で捲し立て、私のクレームを無視して、軽く扱おうとした。その態度に少し腹を立てて、周りの大勢の白人客に十分聞こえるように大声で、「ちょっと待て、なくしたのではなくて、部屋に何もなかったのなら、間違いなくホテルの誰かに盗られたのだ。係のハウス・キー・パーをここに呼べ！」と胸を張って主張すると、英語を喋れることに驚き、目を見開いて、びっくりして、直ぐに、なかつた筈の新しい部屋を手配して呉れて、「私達が間違って、貴方をチェック・アウトしてしまったので、これまで泊まった半月間の部屋代はいただきません」と言い出した。それでも何となく釈然としないまま、結局、マンハッタンのスタッフラー・ヒルトン・ホテルで15日ばかり、只で泊まることになった。翌日、実際にチェック・アウトする時、1 晩分だけの請求だった。最初の日、部屋に放置してあった鍵を掛けないスーツ・ケースから、ハイライトのカートンが全部抜き取られていたのを思い出す。

メイン・ビルディングの二階にあるラルフの部屋の窓から双眼鏡を使って見れば見通せる位置(約800–1000 フィート)で、メイン・ビルディング沿いのメイン道路を直角に横切って、向かいのミンク飼育場の中央門に入った、中央通路の奥の真ん中にある、ワーク・ベンチ(仕事台)へと連れて行かれた。ワーク・ベンチの左横には、およそ1万枚の錆びて古い餌とおがくずのこびり付いた、蜘蛛の巣だらけの長方形の給餌用トレイ(皿)が山積みになっていた。その右側には、200リッターのドラム缶にかなり濃度の濃いヨード液がみなみと入っていた。「薄い鋼鉄製のスクレーパー1つで、ゴミと錆を奇麗に擦り落とすだけで、水で洗う必要はない。汚れをきれいに擦り取った後、ヨード液に1度浸けるだけで良い」と、フレッドが指図した。小ミンクが離乳する時、まだ目の見えない頃、匂いを頼りに巣箱からよろよろ這

い出して来て、スープかプリンの様な餌を嘗め始める時に使うもので、それぞれのケージの床の上にハグ・リングで固定して、籠の上のワイヤ編み目の間から、シートを使って籠の中へ給餌する時に使う、広く薄い、丈夫な鉄製の餌皿である。

朝7時から始めて、夕方6時まで1時間の昼休み以外、黙々と一人で作業を進めた。時々、気が付くと、フレッドやラルフが、電動3輪ゴルフ・カートで音もなく近付いて来て、近くのミンク小屋の立ち並ぶ間から、にこにこしながら私を見ていた。私はこれを2、3日間猛烈にやり、インディアンと白人の混血のリーロイがその後を継いだ。扈にはメイン・ビルディングの中の広いレストランでフレッドの母親、ミセス・エリザベス・スペースがにこにこして、ヘルパーを除くスペース・ファミリーと私の扈食をできぱさと作ってくれ、一般客に混ざり、ラルフ、フレッド、エリノア、パーカー達と一緒にテーブルで食べた。

フレッドによると、ドックと言う日本人が数年前に日本から来ていたらしい。皆からそう呼ばれていたらしく、獣医で北海道のミンク飼育組合直営のミンク場の場長で、ニューヨーク在住の日本人毛皮ブローカー、アンティー・鈴木氏の紹介だったそうだ。私達家族が1975年に飛行機で網走まで行き、彼に会いに行つたが、彼は『獣医ではなかったが、上手く英語で説明出来なかつたため、そのままにして置いた』そうだった。

ミンク場のフォーマンに相当年のロイという白人がいて、息を吸うたびに胸の奥の方でせいぜい音がしていた。私が心配して、「タバコを止めた方が良い」と言うと、涙ぐんでちょっと横を向き、苦笑いしながら咳き込んで、タバコで黄色く汚れた太くて少し先の曲がった人差し指を私の方へ突き出しながら、「お前は良いやつだ！」と体をくねらせ、恥ずかしそうに言った。そんな彼がある時、少し不服そうに口を尖らせて、しかし半分は諦めたような、例の苦笑いを浮かべて、「ラルフが『お前には、俺の全部の仕事を教えろ！』と言つた」と言った。その日から私は、他の混血インディアン達と、限りなく長いミンク小屋の外側から、籠の下に積もったミンクの粪や餌の屑、汚れた巣ぐさを糞尿散布機に一日中延々とシャベルするような重労働から解放されて、ロイと行動を共



にすることになった。朝7時スタート夜6時終了、10時間労働だ。

「ケネディー空港まで来い。迎えに行く。来る時に日本人形の良いのがあれば持って来て欲しい」と、私は日本で1ヶ月程連絡を待ちわびている富美子達に電話した。エリノアの膨大な『世界の人形コレクション』には日本人形が1体もなかったからである。その時、富美子が持つて来た日本人形はエリノアの計らいで、スペース農場、博物館、動物園の絵はがきにもなり、今でもスペース農場へ行くと他の人形達と共に我々を暖かく迎えてくれる。

富美子達が来るまでラルフ宅でお世話になり、ラルフ宅はスペース農場のメイン・ビルディングの2階の1部にあった。5歳のパーカーはいつもラルフやエリノアの後を追っていた。パーカーを見ると、いつも良譲のことを思い出した。ラルフ宅のリビングルームの壁には銃眼が幾つかあって、「もし階下のレストランや博物館や事務所に異変があれば、いつでも、そこからドカンと1発ショット・ガンで撃てる」のだそうだ。各々の銃眼の上にあるガン・ラックにはショット・ガンが一つでも直ぐ撃てるように置いてあった。

彼はアフリカやカナダへ毎年狩りに出かけていた。大きなライオンやインパラの頭、大きなムースの頭、大きなバファローの頭、数頭の鹿等、大きなグリズリー・ベアーのはく製がレストランとギフト・ショップを囲んだ、広大な吹き抜け部分の周りの壁に所狭しと飾ってあった。銃眼のあるラルフのリビングルームの壁は、この吹き抜けの壁の向こう側だった。

北米1の規模の動物園のオーナーだから、ハリウッドの猛獣狩りの映画に出て来る裕福な動物園オーナーとは、ラルフがモデルかも知れないと思った。アメリカの厳しいクリスチャン世界には珍しく、ラルフには2人のワイフがいた。しかも2人とも同じ敷地内に住んでいて、現在のワイフ、エリノアがオフィスで緻密な秘書的な仕事をして頑張っていて、前のワイフ、エリザベスはフレッドの母親でレストランの経営を握って、十人近くのウェイトレスを使って活発に頑張っていた。ランチタイムには、家族全員がレストランで顔を合わせて、それが奇妙に調和していて、誰も避難

する人がいなかった。ラルフが成功者で大人物だからだった。ニューヨークの毛皮屋さん仲間でもラルフの2人のワイフの批判は、タブーのようであった。私がラルフ宅にお世話に成った最初の日の夜、エリノアはエンバ・ミンク飼育者組合から送られたラルフとエリノアの結婚記念ブラック(額)をうれしそうに、見せびらかしていた。

私はこれまで、エリノアのお世話になっていたが、フレッドがこの日、「私が一緒に、ケネディー空港まで、お前の家族を迎えて行く」と宣言した。途中、ステーション・ワゴンの中でフレッドは、「皆に会った時、どう言おうか?」と私に聞いた。返事に困っているうちに、せっかちに「英語が全然分からないのか、少し位分かるだろう」と独り言を言い、「ウェルカム! 位分かるだろう。」と早口に自分で勝手にそう決めてしまった。

ケネディー空港に、我々2人、新調のサファリ・スタイルだった。フレッドは自分の動物園で大勢の観客が覗き込んでいる直径20メートル、深さ3メートル程の水の無い岩とサボテンだらけで、蛇だらけの『毒蛇pond』に、時間が許せば無作に飛び込んで、毎日、そのスタイルと甲高い早口で、『ラトル・スネークのショー』をするのが得意だった。彼は北アメリカの毒蛇の権威の1人で、ラトル・スネークについての著述もある。周りの人々が振り返って我々を見る。フレッドはそれを楽しんでいるようだった。

Facts about **SNAKES**

of the
North East U. S. A.



To Sam
by FRED SPACE
Fred Space



多くの乗客とともに子供たちと富美子が出てきた。生まれて初めての外国の混雑した空港に降り立って、分からぬ言葉をしゃべる白人や黒人に囲まれて、目を見開いて唖然としていた。当時の日本、特に彼等の周りには白人や黒人が全くいなかったからだ。日航の職員に付き添われた彼等は、まっすぐこちらへ来るのだが、子供たちの目線が左右に大きく移り変わり、遠くで見ている私の目線となかなか合わなかった。日焼けで赤ら顔のフレッドが、「お前の家族はどこか?」と聞き、やっと彼等を見つけると、突然、足早に近づいて行き、また大げさに目を丸く見開いて、かがんで両手を一杯広げて子供達を抱き上げようしながら、「ウェル カ ム・トゥ・ア メ リ カ!」と雑踏に負けるものかとばかり、1オクターブ上げて大声(かん高い裏声)で叫んだ。子供たちは怖がって、真剣そのものの顔をしてその場に凍り付いてしまった。中でも、2歳の淳子は今にも泣き出しそうになった。意気込んでいたフレッドが、子供達の突然の意外な反応に当惑して、出鼻を挫かれてしおげるのが、かわいそうに思えた。

次の日、これもフレッドの付き添いで、近くの店まで家具を買いに行った。前途がどうなるか分からないので、買うものは必要最小限にした。大きな2階建てのフル・ベースメントの家の1階の1部屋だけに家族のベッドを入れ、キッチンにテーブルと椅子、ユティリティー・ルームに洗濯機と乾燥機が入った。日本で文化住宅育ちの子供達は2階、1階の各部屋を走り回り、階段、ホール、玄関からポーチへと出たり、ベースメントの隅から隅まで元気に探検していた。残りの大部分の部屋部屋は全くの空き家同然で、何故か我々大人は寂しく、不安で、足が地に着かない思いがした。

我々は直ぐにフォルクスワーゲンの赤いスーパー・ビートルを買うことにした。見知らぬ地で途中故障すると困るので、新車を1999米ドル(当時の日本円60万円ぐらい)で買った。その当時の日本ではフォルクスワーゲンは高級外車で、贅沢品、お得意さんのお医者さんがカブトムシやカルマン・ギアをよく持っていたので、私も一度は買ってみたかった。『何故、北米で、こんなに安いのか』その当時は不思議でならなかった。

夏は緯度が高い上に、サマー・タイムで日暮れが大阪や東京に比べると驚く程遅く、10時間働いて6時に家へ帰って来ても10時頃まで外が明るかった。仕事が終わってから、日頃夢見ていた自家用飛行機のパイロット・レッスンに行くことにした。



数日たって、エリノアの手配で、ラルフのファミリー・ドクターにアポイントメントを取り、メディカル・チェックを済ませ、ソロまでこぎ着けた。上手く飛び立って、1800フィートの高度で長方形を描き、元のランディング・ストゥリップに着陸すれば良い。昔からの夢がだんだん実現されて行くのが嬉しかった。しかし、一旦空に舞い上がると、周りが気になってしかたがない。自動車は限られた平面の視界で、前後左右の平面だけに目と耳で注意すれば良いが、飛行機はそんな訳にはいかない。自分の持てる全てのセンサーを2次元仕様から3次元仕様に切り替えなければならない。その上、乗っているパイパーの音がやかましいから、耳は余り期待出来ない。目と体内のジャイロ的機能だけで、前後左右上下立体的に確認しなければならない。簡単に上下と言うが、前後左右の上下であって、しかも対象となる視界は周360度の水平線まで全部に広がり、車を運転する時に比べ、目の玉を少なくとも何10倍もぐるぐる回さねばならぬ。その上、パイパーには車のようなバック・ミラーが付いてなかった。しかも、ジャイロ的感覚は生まれて初めて使うことになった。パイパーの運転は目と首と頭の運動と平衡感覚の訓練に良いようで、しかもその分、得る快感も比較にならない程である。実際に空気を押さえて、鳥のように浮力を腰に実感しながら、3次元の別世界に飛び込んだように思える。



空から地上の教官と家族が見えて、いよいよ、ベース・レッグから、ファイナル・レッグへ入り、高度を徐々に下げ始めた。突然、どうも自分と滑走路の間に、もう1機セスナが着陸しようとしていた。回りの山並みの色と良く似ていて、気が付くのが遅れたように思えた。地上の教官に指導を仰ぐにも、無線操作はまだ全然教わっていない。私ははたと困った。教官と乗っていた時、このような事態には出くわさなかったのだ。実はこのとき、まだ数時間しか練習してなかった。私は前のセスナに衝突したくない。近づき過ぎなのか、そのまま連れ立って下りても、ブレーキが間に合うのかどうか分からない。オーヴァー・シーティングは、まだ習っていなかったと思うが、タッチ・ダウンした瞬間、追突しない用心のため、気を利かせて、また舞い上がることにした。前と同じように、もう1度回って帰れば良いと、冷静に思ったのだ。しかし、地上の教官が私の方を見上げて、走り回って、慌てているのが見えた。どうもやはりそのまま下りても、前のセスナとの距離は大丈夫だったようである。

実に快適な自分の意志の反映したソロ1番だったが、後で聞いたところによると、教官は『私が着陸にびびって、うまく下りられないのでは?』と、私を知らないものだから(初めての日本人で)心配したそうである。

8. 事務局からお知らせ 一

小冊子謹呈の連絡

2022年1月に発行しました前号
りらいぶジャーナル No.42 2022年新春号
に掲載した、木津谷 文吾 様からのご寄稿
「元防衛大臣 森本敏さまを囲む会」に出席して
に関連し、「元防衛大臣 森本敏様を囲む会」
記念誌を2022年3月に発刊致しました。
80ページの小冊子(非売品)ですが、**会員の皆様**
で、**ご希望のお方に謹呈**致しております。
ご希望の方は、以下までご連絡願います。

(連絡先)

・ 阿賀 敏雄 関西支部長

電話番号 : 090-1896-4575

メール : aga1717hibari2@icloud.com

発行 : 特定非営利活動法人 リタイアメント情報センター (R&I)

〒100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3 日比谷国際ビル 18 階 ヴィップシステム(株)内

●TEL 03-5860-9483 FAX 03-5860-9477

●事務局 TEL 080-9982-6237

●事務局 E-mail : haruo_shimamura@hotmail.com HP : <http://retire-info.org/>
(発行責任者) 事務局 島村 晴雄